学校力を高め教職員の参画を促す校内研修の実践的研究

学籍番号　179951
氏　　名　加茂　裕子
主指導教員　田村　知子

１．学校組織における現状と課題

これまで学校は、社会の急激な変化に伴う子どもの環境の変化、多様化・複雑化など様々な課題に対応してきた。そして新たに、平成 32 年度新学習指導要領実施における小学校外国語科、評価を伴う「特別の教科道徳」の導入、事例市における平成 31 年度小中一貫教育実現など改革が進んでいる。このような状況下、教員は目の前の仕事をこなすのが精一杯で前例踏襲に陥り、現状、なかなか学校改革には至らなかった。

しかし、一見問題がないように見えても、どの子どもにも固有の課題があり、どの学校にも課題がある。これら多様な課題に向き合うには、その学校の教育活動の実施主体である教職員を巻き込んだ校長を中心とした学校組織における改革が、喫緊の課題なのである。

そこで、本研究においては、校内授業研究および校内研修を通して、教職員の参画を促し、校長やミドルリーダーを中心とした教職員の意識の変容や育成が学校づくりにつながり、学校力が高まる過程を明らかにする。

２．Ａ小学校における事例

Ａ小学校の課題について、Ｙ校長は、児童の学力向上と、教員の授業力向上ととらえていた。

平成27年度は、前年度の人事配置および「めざす子ども像」の継承を前提に始まった。課題に基づき、面談による教職員把握、道徳教育の充実、校内授業研究の促進、放課後サポートデイの見直し、「めざす子ども像」の変更などに向けて取組んだ。ミドルリーダーのリーダー性の萌芽が見られた一方、変化を好まない組織風土やＹ校長着任前に発生した傷害事件による制限は、阻害要因となった。

平成28年度は、学校教育目標および「めざす子ども像」の新規設定、学力向上を支える習熟度別少人数指導加配教員人事、校内授業研究の活性化、校内研修の実施などに取組んだ。少人数加配教員はリーダー性を発揮し、標準学力調査の好成績につながった。校内授業研究における教員の挑戦意欲が見られた。一方、校内研修の開催時期、校長と教職員間

での意思疎通や児童理解の共有化などに課題が見られた。

平成29年度は、児童の学力向上をめざし、分掌組織の一部改称、「めざす子ども像」の一部変更および組織課題の校内研修の開催、地域教育協議会フェスタにおける児童ボランティア活動などに取組んだ。とくに、校内研修では、教職員のコミュニケーションの促進が図られ、児童理解の共有化がなされた。そして、校内授業研究では、実際に、児童の成長や変容を認識することができた。一方、さまざま取組みについて、目的や見通しなどを十分に示すことができなかった。

分散型リーダーシップについて、リーダー性を発揮したミドルリーダーを事例研究した。校長のリーダーシップへの対応はさまざまだが、学校経営における貢献意欲は高い。

３．校内研修の分析

授業力向上をめざす校内授業研究を含む校内研修は、3 年間で 127 回を数えた。

すべての校内研修について、実施根拠、研修課題、実施根拠と研修課題の総括、実施月、双方向的研修、外部講師の有無、研修の型、研修主体者の年代、PDCA などさまざまな項目に焦点化して分類・整理・分析した。

また、平成 29 年度に教職員間のコミュニケーションと共通理解づくりをめざして、校内研修に取組んだ。組織課題の校内研修を整理・分析するなかで、教職員の参画を促した過程や、事例校の学校力が高まっていった過程を整理した。

４．まとめと考察

本研究では、校内授業研究を含む校内研修を通して、学校力を高め教職員の参画を促すことを目的に、3 年間の学校経営における取組みを詳述してきた。

校長の取組みは、第 1 は、児童理解の共有を図る「めざす子ども像」の設置ならびに校内研修の実施、第 2 は、校内授業研究の活性化、第 3 は、学力向上支援策、第 4 は、教職員の人材育成などであった。

実践上の成果は、第 1 は、3 年間の校内研修の数量的な向上、第 2 は、自主的研修や校内研修の行動化など質的変化、第 3 は、児童理解や学校組織が研修課題となったこと、第 4 は、若手教員の活躍、第 5 は、校内研修が教職員の参画意識につながったことであった。一方、課題は、第 1 は、校内研修を数多く行ったことによる教職員の負担感、第 2 は、自主的研修を増やすこと、第 3 は、教職員の承認要求を十分に満たせなかったこと、第 4 は、校内授業研究の実施時期の偏りであった。以上、校内研修を主要な手段として、教職員の参画を促し、学校力を向上させるプロセスと要件を実践的に明らかにできた。

本研究の意義は、校長の目を通して校内研修を明らかにしたが、事例校における実践研究であるため、より客観性を担保するという観点では限界があった。展望として、校内研修を通して詳述された研究が蓄積されることにより、数量調査では計り知れない、時間軸に伴う変容過程などが、一つの実践事例として役立てればこれに勝る喜びはない。